

キリスト教とイスラムの改宗者

二人のイタリア人新聞記者がイスラム教からキリスト教に改宗した人の証言を集めた本を出版した。それと前後して、『タイム紙』に、イスラムへの改宗者の間に原理主義者が増殖するわけを問う記事が出ている。

カトリックの新聞『アヴヴェニレ』紙の編集長ジョルジオ・パウロッチと、レバノン人の記者カミッレ・エイドの二人が、『イスラムから来たキリスト教徒』(*I cristiani venuti dall'Islam, Piemme*)と題した本を上梓しイタリア在住の30人の改宗者の話を紹介した。『ゼニット』(2006年9月11,12日)に載ったインタビューによれば、この二人は改宗という行為が信仰と法律の面でいかなる変化を引き起こすのかを、「改宗者の実体験を通じて」調査し、「迫害を受ける危険があるにもかかわらず、そこまでイエス・キリストを愛する人が存在するのはなぜかを解明しよう」とした。

パウロッチによれば、キリスト教への改宗者は、西欧でイスラムに改宗する人とは違って、自己の体験を語ることにさへ困難や危険を感じている。実際、著者がこの書を出筆するにあたっての最初の難関は、勇気を持って自己の体験を語る人をどうやって見つけるかであった。この恐怖心のために、キリスト教への改宗者の実数を知ることは不可能となっている。

彼らの調査に拠れば、(イタリアには)「アフリカ、中近東、アジア出身の何百人もの改宗者がいる」と言う。ある者はイタリアで洗礼を受け、またある者は自分の出身地か他の国で洗礼を受けた後でイタリアに移住した。

電話やインターネットや新聞を通じて直接に知り合ったこれらの改宗者の大部分は、自分たちは精神的に何か満たされないものを感じていたが、それに対する満足すべき解答をコーランにもまた受けた教育にも見いだせず悶々としていたとき、彼らには模範的と写ったキリスト信者と出会ったことが改宗のきっかけとなったと語る。

宗教上の自由の欠如はイスラム国家だけに見られるものではない。「残念なことだが、イタリアのような国でもこの点で自由が制限されている。と言うのは、イスラム教が自分の宗教からの脱退を許さない姿勢を保っているからだ」とパウロッチは説明する。

つまり、もし改宗が公に知れ渡れば、改宗者たちは脅迫と差別に曝される。時には、迫害は自分の家族や友人からやってくる。「イスラム教国においては、彼らは市民としての権利を失い、死刑判決を受ける危険すらある」とパウロッチは指摘する。

『イスラムについての100の質問』(ACEPRENSA, 126/03)の著者 Samir Khalil Shamir のような専門家によれば、イスラム教は背教者に死刑を定めていない。改宗者への罰について扱っているコーランの14の章には、その罰がどんなものかを明言しているものはない。パウロッチは、背教罪はイスラム国家の政府が政敵を失脚させるために利用されていると考える。

この視点に立って、この書物はイスラム国家に宗教的自由を認めるように進言している。しかし同時に、西欧の政治家たちに少なくとも自国の領内ではこの自由が保障されるよう手を打つことを検討するべきではないかと提案する。そのためにはまずイスラム教の共同体が自己のメンバーにこの自由を与える必要がある。最後に、この書物が生ぬるい多くの信者たちの宗教生活を活

性化できればという著者たちの望みも示されている。

こういったことを考えると、サバチーナ・ジャメスの自伝『イスラムからキリスト教へ。私のたどった道』(Del Islam al cristianismo : mi historia. Palabra)は興味深い体験を紹介している。パキスタンに生まれたが、オーストリアで育った著者は、両親に隠れて西欧の普通の少女の生活を送っていた。こうして、一方で学校と町では西欧流の生活をし、他方家の中では伝統的なパキスタンの家族の生活をするという二重生活を送り、その二つの間での葛藤に苦しんでいた。従兄弟との間に婚約が成立したのでパキスタンに帰国しなければならなかった。この祖国でその葛藤が表面化する。

ヨーロッパに帰り従兄弟との結婚を終えてから、サバチーナは一人の友人のおかげでキリスト教に興味を感じ始め、とうとう改宗してしまう。両親の怒りは尋常ではなく、娘を殺すとまで脅迫する事態に至った。この書物はヨーロッパで育った若いイスラム教徒の心の葛藤を知るために貴重なものである。

イスラムへの改宗者

西欧におけるイスラム教への改宗者の数も正確に知ることと同様に容易ではないが、それは増加しているという印象がある、と『タイム』(2006年8月28日)は指摘する。同紙は、社会の世俗化はいくらかの人々をして道徳的精神的な規範を探させるようになったが、西欧人の中にはイスラム教の中にそれを見出す人がいると解説している。ただし、合衆国でのアンケート調査では、イスラム教を好意的に捉える人はアメリカ人の20%に過ぎない。

その上、イスラムへの改宗は比較的簡単である。カトリックやユダヤ教が改宗のために一定の準備と勉強を要求するのに対し、イスラム教は公の信仰宣言 (shahadah) で足りる。

イスラム教は、とりわけ社会に対して不満を抱えている青年にとって魅力的となっている。イスラム教が反抗のための道と写っているのである。ヨーロッパでイスラム教に改宗する人の大部分は20歳以下の若者である。イスラム原理主義の専門家 Farhard Khosrokhavar は「イスラム教は負け組や日の当たらない所に追いやられた人たちにとっての避難所になっている。(・・・) 20年前であったならば、共産主義か左翼のイデオロギーを選んだであろうような人々がイスラム教を選んでいる。イスラム教は今では帝国主義と戦う旗印となっている」と断言する。

『タイム』は、これがなぜ西欧の改宗者の中から原理主義者が多く生まれるかの説明となっていると考える。改宗者でベルギーのイスラム教協会の会長を勤める Didier-Yacine Beyens は、「改宗者は過激思想の形容を非常に受けやすい体質を持つ」とする。つい最近ロンドンで逮捕されたテロ未遂事件の容疑者の二人は改宗者であった。当局は、テロのグループが西欧人の改宗者の中からシンパを募っていると疑っている。西欧人なら疑惑がかかりにくいからである。

(ACEPRENSA, 105/06. 4~10-X-2006)